

植物珪酸体分析による下宅部遺跡 出土編組製品と素材束の素材同定

Identification of Baskets and Bundles of Their Materials
from the Shimo-yakebe Site, Tokyo Using the Plant Opal Phytolith Analysis

米田恭子・佐々木由香

YONEDA Kyoko and SASAKI Yuka

はじめに

①分析試料

②分析方法

③分析結果

④考察

⑤結論

【論文要旨】

東京都東村山市の下宅部遺跡では、縄文時代中期中葉から晩期中葉の河道から編組製品と編組製品の素材を束状にした遺物（以下、素材束）が出土した。下宅部遺跡から出土した編組製品の素材について同定が行われた結果、ほとんどがタケ亜科であることが明らかとなっている。しかし、解剖学的な検討では、タケ亜科以上の詳細な同定は不可能である。そこで、主にイネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体の形状から母植物を同定する植物珪酸体分析の手法を用いて、下宅部遺跡出土の編組製品1点と素材束2点を対象として素材の母植物を検討した。その結果、編組製品と素材束からネザサ節型、編組製品からササ属に由来する植物珪酸体が検出され、アズマネザサなどのネザサ節型とスズタケやミヤコザサなどのササ属などのササ類が、素材植物の候補として挙げられた。また、編組製品が出土した河道堆積物について植物珪酸体の抽出を行った結果、素材の母植物の候補としてあげられたササ類の珪酸体が検出され、身近な場所に編組製品の素材となり得るササ類の存在が確認された。植物珪酸体分析は、解剖学的な分析では同定が困難なイネ科の編組製品の素材を同定する上で、有効な手段になると考えた。

【キーワード】 機動細胞珪酸体、植物珪酸体分析、縄文時代後期、編組製品の素材、タケ亜科